

## 扉

中井 ひさ子

私は運動嫌いである。しかし、食べることは好きである。それゆえ太る。これでは困ると、スポーツジムの会員にだってなった。でも会員証を使ったのは、二年間のうち数えるほどだった。

もう女はやめましたと、太るにまかせていた。

「運動しなきゃだめでしょ。だめでしょ」

娘が口やかましく言い出した。どうも、介護の不安を感じてきたらしい。

「倒れたらすぐ病院に放り込むよ」

毎日のようにおどかされ、やっと重い腰をあげた。

とりあえず毎日一時間ほど歩くことにした。歩くならば一番好きな時間帯の夕暮れ時である。

灯りがにじんでいる。人々は足早に互いに無関心である。車の往来が激しくなる。街路樹の櫛が時々ため息をつき揺れる。この空気のなかにすっぽり入り込んでしまう。時空の違う世界に來たと感じる瞬時である。

いろいろな人と出会う。思いもしないことがおこるのだ。

夕陽が沈み、青に少しずつ灰色を流し、空が深さを増していくと、青梅街道沿いにある三階建てのマンションが浮かび上がる。ゆるやかな光のなか、横に五軒の扉が整然と並んでいる。

いつも何故か懐かしく見上げながら通っていた。

二階の右から三軒目の扉が開き、男が一人出てきた。ふと、立ち止まった私に右手を上げている。父だ。こんなところに住んでいた。私は目を凝らしもう一度見据えた。やはり、少し照れたような顔をして父がそこに立っていた。

「どこにいくの」

思わずでた言葉。

「お前に会いに来たんだ」

「珈琲でものむかい？」

昔のままのおだやかな口調だった。

マンションの下の小さな喫茶店に入り、窓際の椅子に座った。父は、嬉しそうだ。

「この珈琲、意外に美味いんだ」

珈琲はやはりブラックだった。ゆっくりと味わい口にする飲み方も懐かしい。私が珈琲を好きになったのは、父に連れられ外出した時、いつも喫茶店に寄ったからだった。なんだか、それが日常から外れているようで、とても楽しかった。ちよっ

ぴり、おとなになった気分だった。

「変わらないね、元気だったと聞くのも変だけれどね」

少し照れくさく、笑いながら珈琲を口にする。

「そうだな」

父も左手に持つ珈琲カップを見ながら苦笑する。

「何か用事があった？話したいことでもあったの」

「別に、ふと思いついたんだ」

遠い目をして答え、美味しそうに珈琲を飲みほす父。

「じゃあな」

と、マンションの扉の向こうに消えた。

七年前に逝った父は相変わらず無口だった。

あそこに父が住んでいる。扉を見上げてみると、再び扉が開き塾のカバンを持った男の子が飛び出し、私には目もくれず走り去った。

あれからも、毎日マンションの前を歩いている。体重は少しもかわらない。